

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄							備考	
計画の区分	研究科の専攻の設置								
フリガナ設置者	コクリツガクホウジシキ ナラキョウイクダガク								
フリガナ大学の名称	ナラキョウイクダガクダクイン 奈良教育大学大学院 (Nara University of Education, Graduate School)								
大学本部の位置	奈良県奈良市高畑町								
大学の目的	奈良教育大学は、学芸の理論とその応用とを教授研究し、高い知性と豊かな教養とを備えた人材、特に有能な教育者を育てるとともに、この地方に特色のある文化の向上を図ることを目的とする。								
新設学部等の目的	修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、教育関係諸科学の研究能力と教育に関わる人材として伝統文化の持続発展や国際理解教育の進展に寄与しうするための卓越した能力を培うことを目的としている。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	教育学研究科 [Graduate School of Education] 伝統文化教育・国際理解教育専攻 [Master's Program in Education, Traditional Culture Education/International Education Major]	2年	20人	-	40人	修士(教育学) 【Master of Education】	令和4年4月 第1年次	奈良県奈良市高畑町	
	計		20	-	40				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		奈良教育大学大学院 教育学研究科 修士課程 人間発達専攻(廃止) (△9) (令和4年4月) ※令和4年4月学生募集停止 教科教育専攻(廃止) (△36) (令和4年4月) ※令和4年4月学生募集停止							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻	12科目	14科目	1科目	27科目	30単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設	教育学研究科(専門職学位課程) 教職開発専攻	44人 (44)	39人 (39)	1人 (1)	0人 (0)	84人 (84)	0人 (0)	50人 (50)
		教育学研究科(修士課程) 伝統文化教育・国際理解教育専攻	5 (5)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	5 (5)
		計	49 (49)	42 (42)	1 (1)	0 (0)	92 (92)	0 (0)	- (-)
	既設	-	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)
-		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
計		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
合計		49 (49)	42 (42)	1 (1)	0 (0)	92 (92)	0 (0)	- (-)	

【基礎となる学部】
教育学部

令和3年8月届出済み(予定)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体				
	事 務 職 員		55 人 (55)	0 人 (0)	55 人 (55)					
	技 術 職 員		6 (6)	0 (0)	6 (6)					
	図 書 館 専 門 職 員		2 (2)	0 (0)	2 (2)					
	そ の 他 の 職 員		1 (1)	0 (0)	1 (1)					
	計		64 (64)	0 (0)	64 (64)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
	校 舎 敷 地	0 m ²	87,896 m ²	0 m ²	87,896 m ²					
	運 動 場 用 地	0 m ²	26,537 m ²	0 m ²	26,537 m ²					
	小 計	0 m ²	114,433 m ²	0 m ²	114,433 m ²					
	そ の 他	0 m ²	1,617,596 m ²	0 m ²	1,617,596 m ²					
	合 計	0 m ²	1,732,029 m ²	0 m ²	1,732,029 m ²					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体				
		0 m ² (0 m ²)	27,066 m ² (27,066 m ²)	0 m ² (0 m ²)	27,066 m ² (27,066 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	28 室	28 室	38 室	6 室 (補助職員 3 人)	0 室 (補助職員 0 人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称			室 数	大学全体				
		教育学研究科 伝統文化教育・国際理解教育専攻			8 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書	学術雑誌	電子ジャーナル	視聴覚資料	機械・器具	標本	大学全体		
		[うち外国書]	[うち外国書]	[うち外国書]	点	点	点			
		教育学研究科 伝統文化教育・国際 理解教育専攻	357,087 [48,890] (350,531 [48,174])	8,103 [3,175] (8,103 [3,175])	2,281 [2,281] (2,281 [2,281])	883 (883)	412 (412)		0 (0)	
		計	357,087 [48,890] (350,531 [48,174])	8,103 [3,175] (8,103 [3,175])	2,281 [2,281] (2,281 [2,281])	883 (883)	412 (412)		0 (0)	
図書館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数			大学全体		
	3,388 m ²		373		356,222冊					
体育館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
	1,028 m ²		屋 外 プ ー ル テ ニ ス コ ー ト							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費の見積り	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	国費による
		教員1人当り研究費等								
		共同研究費等								
		図書購入費								
	設備購入費									
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
千円		千円	千円	千円	千円	千円	千円			
学生納付金以外の維持方法の概要										
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称	奈良教育大学								
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	教育学部 学校教育教員養成課程	年	人	年次人	人	学士(教育)	1.05	平成24年度	奈良県奈良市高畑町	
	教育学研究科 (修士課程)									
	人間発達専攻	2	-	-	-	修士(教育学)	-	平成28年度	奈良県奈良市高畑町	
	教科教育専攻	2	-	-	-	修士(教育学)	-	平成16年度	奈良県奈良市高畑町	
教育学研究科 (専門職学位課程)										
教職開発専攻	2	-	-	-	教職修士(専門職)	-	平成20年度	奈良県奈良市高畑町		

<p>附属施設の概要</p>	<p>名称：附属中学校 目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施 所在地：奈良市法蓮町2058-2 設置年月：1947年4月 規模等：土地面積30,079㎡、建物面積5,787㎡</p> <p>名称：附属小学校 目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施 所在地：奈良市高畑町 設置年月：1889年4月 規模等：建物面積8,880㎡</p> <p>名称：附属幼稚園 目的：本学における児童、生徒又は、幼児の教育又は保育に関する研究並びに教育実習計画に従い学生の教育実習の実施 所在地：奈良市高畑町 設置年月：1927年4月 規模等：建物面積1,013㎡</p>	
----------------	---	--

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「－」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要																
(教育学研究科伝統文化教育・国際理解教育専攻)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通コア科目	世界の中の奈良 ―文化を知り・つなぎ・伝える―	1前	4				○		5	3					オムニバス・共同(一部)	
	グローバル・シティズンシップ教育論	1前	2				○			1						
	SDGsと教育	1前	2				○		5	3					集中・オムニバス・共同(一部)	
	小計(3科目)	—	8	0	0		—		5	3	0	0	0	0		
実践コア科目	伝統文化の継承と発信	1通		4			○		1					兼1	共同	
	書道の芸術性と実用性	1前		2			○			1						
	多文化共生社会創造のための教育	1後		2			○		3	1					オムニバス・共同(一部)	
	小計(3科目)	—	0	8	0		—		4	2	0	0	0	兼1		
専門深化科目	伝統文化教育領域	美術工芸文化財学Ⅰ(美術作品の「物語」)	1・2前		2		○		1							
		美術工芸文化財学Ⅱ(美術作品との対話)	1・2後		2			○	1							
		文化財技法Ⅰ(文化財の保存と技法の継承)	1・2前		2			○		1						
		文化財技法Ⅱ(文化財技法の追体験)	1・2後		2			○	1							
		文化財科学Ⅰ(文化財科学の方法)	1・2前		2			○							兼1	
		文化財科学Ⅱ(文化財科学の実践)	1・2後		2				○						兼1	
		漢字書法演習(漢字の五書体と篆刻の技法)	1・2後		2				○						兼2	オムニバス
		仮名書法演習(臨書から創作への展開)	1・2後		2				○		1					
		書道芸術研究(書の背景)	1・2後		2			○							兼1	
		書道文化研究(文字とは何か)	1・2前		2			○							兼1	隔年
	国際理解教育領域	言語文化研究Ⅰ(日本語教育の原理)	1・2前		2			○			1					
		言語文化研究Ⅱ(日本語教育の実践)	1・2後		2			○			1					
		言語文化研究Ⅲ(漢文学とは何か)	1・2前		2			○		1						
		言語文化研究Ⅳ(奈良ゆかりの日本漢文)	1・2後		2			○		1						
		言語文化研究Ⅴ(身近な言葉)	1・2前		2			○		1						
		言語文化研究Ⅵ(言語構造の探究)	1・2後		2			○		1						
		国際理解教育Ⅰ(シティズンシップ教育の原理)	1・2前		2			○			1					
		国際理解教育Ⅱ(複言語・複文化教育の原理)	1・2後		2			○		1						
		国際理解教育Ⅲ(シティズンシップ教育の実践)	1・2後		2				○			1				
		国際理解教育Ⅳ(複言語・複文化教育の実践)	1・2前		2				○		1					
小計(20科目)	—	0	40	0		—		5	3	0	0	0	0	兼5		
課題研究	課題研究	1~2前・後	4				○		5	3						
	小計(1科目)	—	4	0	0		—		5	3	0	0	0	0		
合計(27科目)		—	12	48	0		—		5	3	0	0	0	0	兼5	
学位又は称号	修士(教育学)			学位又は学科の分野				教育学・保育学関係								
修了要件及び履修方法								授業期間等								
<ul style="list-style-type: none"> ・共通コア科目：8単位必修 ・実践コア科目：2単位以上選択必修 ・専門深化科目：14単位以上選択必修(各領域2単位以上必修) ・課題研究：4単位必修 ・計30単位以上 ※実践コア科目と専門深化科目は、併せて18単位履修するものとする。								1学年の学期区分		2期						
								1学期の授業期間		15週						
								1時限の授業時間		90分						

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科伝統文化教育・国際理解教育専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 コア 科目	世界の中の奈良 ―文化を知り・つなぎ・伝える―	<p>専攻での学びの導入として、フィールドワークや実物により、奈良を基盤とする伝統文化、国際理解教育についての基礎的な知識を身に付ける。また、実体験からの学びを、他者と共有あるいは発信する基本的技能を学ぶ。</p> <p>本授業は、原則として1回2コマ連続となり、半日かけてのフィールドワークや実技を伴う。訪問先は、奈良国立博物館、春日大社、奈良市街地、奈良県立国際高校、天理市立黒塚古墳展示館…などの予定である。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4 山岸公基、1 大山明彦、7 北山聡佳、5 吉村雅仁、8 橋崎頼子、6 和泉元千春、3 前田広幸、2 橋本昭典/1回) (共同) 授業のアウトラインを示し、教員があらかじめ担当の日程や内容を伝え、受講生にとって関心のある研究分野を聴き取る。 (4 山岸公基/4回) 奈良の美術工芸文化財の世界性に関する講義(「吉備塚古墳出土三累環頭大刀象嵌文様」にみる5世紀の東アジア文化交流、「三面の阿修羅の源流手」ほか)を行い、奈良国立博物館なら仏像館見学と日本の仏像彫刻に関するフィールドワーク、春日大社と文化遺産の日本的性格に関するフィールドワーク、天理市の古墳と仏像彫刻の国際性に関するフィールドワークを実施する。 (1 大山明彦/1回) 『正倉院宝物』や国宝『薬師寺東塔』などに見る奈良時代の彩色を対象とした講義で、それらに関する基礎的な知識を学ぶ、併せて和紙や天然鉱物などによる色紙を用いたオリジナル教材を、切り絵で体験する。 (7 北山聡佳/2回) 書道に関連する「奈良墨」工場における製墨の見学や、奈良の博物館での書作品の鑑賞を通して、奈良ならではの視点で書道を体験し、奈良に伝わる伝統文化としての書道の理解を深める。 (8 橋崎頼子/1回) 複数の言語・文化的ルーツを持つ子どもたちが集い、交流する活動場所等を訪問し、見学を行うとともに支援する側への聞き取りを行う。それを通して多文化共生社会を目指す上での現状や課題を認識する。 (6 和泉元千春/1回) 地域の日本語教室等を見学し、国内の日本語非母語話者に対する日本語支援の実態と課題から国際理解教育について理解を深める。 (3 前田広幸/1回) 奈良時代の日本語を記録した資料を対象に、そこでの表記と音声音韻との関係や語彙・文法に関し、基礎的な事項を講義し、また先人がそこに規則性の存在を発見していった過程を部分的に追体験する。 (2 橋本昭典/1回) 柳沢吉保は漢文のみならず当時の口語中国語に通じ、中国渡来の禅僧と中国語で交流している。鎮国下にあつて吉保はどのようにして口語中国語を習得し、中国人と交流したのか、郡山・柳沢文庫に残る史料からこの一端を窺いつつ江戸の国際性について考えるとともに、奈良に残された江戸期漢文・中国語史料の価値を知る。 (5 吉村雅仁/1回) 日本でもまれな外国語教育カリキュラムを持つ奈良県立国際高等学校を訪問し、授業観察するとともに校長や言語担当教員への聞き取りを行い、学校が「国際化」に対してどのようなとらえ方をしているのかを理解する。 (4 山岸公基、1 大山明彦、7 北山聡佳、5 吉村雅仁、8 橋崎頼子、6 和泉元千春、3 前田広幸、2 橋本昭典/2回) (共同) 講義や、フィールドワーク等による実体験からの学びに基づき、学びの成果を発表し、情報・知識の発信を試行する。</p>	オムニバス・共同(一部)
	グローバル・シティズンシップ教育論	<p>本授業では、グローバル・シティズンシップ育成を考える上での見方・考え方を身に付けることを目指す。そのため、まずグローバル・シティズンシップ育成が求められる背景としてのグローバル化と其中で生じている社会的排除という課題を扱う。次に、この課題を解決する方法としての教育を通じた市民育成という形での社会的包摂についてみていく。その後、グローバルな市民に求められる資質・能力のあり方や、そのような市民を育てるための学習内容について取り上げ、考察していく。</p>	
	SDGsと教育	<p>SDGsについての背景、意義、世界と日本における取組について、その先導的立場の講師から講義を受け、SDGsの達成に向け本学修士課程院生として在学中、及び修了後に何ができるかを議論する。講義は、ユネスコスクールとしての本学の経緯と取組から始める。その後、国連での決議と世界における進捗、日本における現状、企業における取組、学校教育におけるESDとの関係と続け、最後に院生一人一人が大学院での学びを生かし、SDGsの達成に向けてどのように貢献したいか、プレゼンとディスカッションを行って締めくくる。 (オムニバス方式/全15回) (4 山岸公基/13回) 奈良教育大学におけるSDGsとESDに関する取組について、講義ののち、外部講師を招き、国連におけるSDGsの現状、日本におけるSDGs・ESDの現状、企業におけるSDGsの取組、学校におけるESDの取組についての最新事例に触れ、知り、何ができるかを考える機会を設ける。 (4 山岸公基、1 大山明彦、7 北山聡佳、5 吉村雅仁、8 橋崎頼子、6 和泉元千春、3 前田広幸、2 橋本昭典/2回) (共同) 第1回～第13回の講話を受け、SDGsの達成に向け、大学院でどのように学び、研究し、貢献していくかについて、院生がプレゼンテーションを行い、各教員の専門的な研究の観点を交え、ディスカッションを行う。</p>	オムニバス・共同(一部)
実践 コア 科目	伝統文化の継承と発信	<p>本学と奈良カレッジズを形成する奈良国立博物館の特別展・特別陳列にあわせ、同博物館で行われる親子ワークショップの立案、博物館との意見交換、実施とまとめを内容とする(博物館との協議次第で、オンライン開催の可能性もある)。このワークショップの立案・実施に際しては、モチーフとする文化財自体への理解だけでなく、工作のスキルや子どもへの理解が必須で、奈良国立博物館としても子ども理解や工作のスキルを含むワークショップ実施のための総合力において本学修士課程に期待することが大きく、奈良カレッジズの実質化につながっている。受講生にとっては、学部での学び、そして修士課程で現在進行している学びを、教育に応用する得難い機会となる。また、伝統文化の結晶とも称される学内外の文化財・文化遺産の実物や模造を、実地調査・写真撮影や文献探索等の研究を前提としながら、(場合によっては借用交渉を行って)展示(会場として学内教育資料館を想定)、さらに展示・研究内容等を展示パネル・図録・ハンドブックやホームページ等により広く公開・広報・教材化する。奈良の美術に関する認識を深め、視覚とその理解との架橋を経験し、内容論に裏付けられた伝統文化発信手法を獲得して学校教育や社会教育(生涯学習)に活用する。 (4 山岸公基) 主担当として、授業の理論的な講義、及び院生の議論のファシリテートを行う。 (11 金原正明) 副担当として、授業の理論的な補足、及び院生の議論のファシリテーターを支援する。</p>	共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実践 コア 科目	書道の芸術性と実用性	現代社会において手書きの重要性が再注目されるなかで、書道の芸術性と実用性を理解し実践することは、ますます重要となる。本授業においては、身近な書を取りあげ、自らの表現の幅を広げるとともに、手書き文字の在り方を考察し、社会において実践する力を身に付けることを目的とする。なお、本授業においては、日本にしかない書（仮名書道）を中心とする。加えて、書道の基本となる臨書を体験することにより、長い歴史の中でおこなわれた書道の歴史的文化的背景を体験し、それを伝えていく力（社会における発信力や指導力を含む）を身に付ける。	
	多文化共生社会創造のための教育	本授業の目的は、多文化共生社会を構築するためのコミュニケーションの方策を探究することである。特にコミュニケーションのための言語に着目し、言語能力をどのように捉えるのか、言語の異なる者同士が共生する際にどのような問題があるのか、相互理解のために何が必要なのか、また理解不可能な場合に何ができるのかを考える。さらに、言語ないしは言語行為に内在する文化的事象の分析も行い、自己および他者をより深く理解するための視点を獲得する。 (オムニバス方式/全15回) (5 吉村雅仁/3回) 日本そして世界の言語の多様性を知り、多文化共生社会における言語の役割及び実際のコミュニケーションの有り様を理解する。その際、具体的事例として、行政、医療、司法における言語サービスおよび学校教育における言語教育政策を挙げ、「言語権」の観点から批判的検討を行い、より妥当な政策を考える。 (6 和泉元千春/3回) 全15回のうち3回を担当し、学校教育現場における日本語指導が必要な子どもの課題やビジネス場面における外国人の異文化間コミュニケーション上の課題の把握、地域における「やさしい日本語」の理念とその批判的再考を通して、多文化共生社会創造の実現のために必要なコミュニケーションの在り方について考える。 (3 前田広幸/3回) 場面を設定して、感謝や謝罪、依頼や受諾・拒否といった種々の言語行為を、日本語学習者・日本語母語話者が日本語でやりとりした模擬会話データを資料とし、背景にある枠組みが異なった場合、話し手が意図するところと聞き手の受け取り方との間でどのようなずれが生じうるかを検討し、コミュニケーションに際し留意する必要がある点について考えていく。 (2 橋本昭典/3回) 中華民国における日本人経営中国語新聞社の成功に見る多言語共生、世界のチャイナタウン形成と宗教の果たす役割、日本の華僑学校の歴史と現在及び地域とのつながりを例として分析しながら、多文化共生社会創造の可能性を探る。 (5 吉村雅仁、6 和泉元千春、3 前田広幸、2 橋本昭典/3回) (共同) 言語や背景文化の異なる他者同士のコミュニケーションに必要な資質能力およびその育成のための教育実践を検討する。	オムニバス・共同 (一部)
専門 深化 科目	美術工芸文化財学Ⅰ（美術作品の「物語」）	美術工芸文化財研究のためのケース・スタディーとして、一ないし複数のテーマをとりあげて画像や、可能ならば現物を示しつつ論じる。テーマとして、「インド美術とその東アジアへの影響」・「仏教美術—中国と日本、その類似と相違」・「朝鮮三国（百済・古新羅・高句麗）及び統一新羅の美術と日本」・「日本における仏教彫刻の多様性」ほかを準備している。第一回授業で受講生の意向を聴き、協議を経て講義内容を決定するが、学校教育だけでなく社会教育（生涯学習）にも資する内容とし、個別のトピックが普遍に通じるよう配慮して、日本・東洋美術史を中心に新たな「物語」を生み出してゆく。	
	美術工芸文化財学Ⅱ（美術作品との対話）	美術を考えることは不断の対話によってはじめて成り立つ。すなわち、作品との無言の対話はいままでもなく、作者や享受者、美術作品と関わってきた先人の言葉に耳を傾け、また現在同じ条件のもと美術に接し得る一人一人が自分の感覚を言葉などの手段で伝え合っはじめて、独語に陥ることなく美術の、そしてそこに託された共有可能な普遍的感受性の深みに達することができるのであり、学校教育や社会教育（生涯学習）の場もその例外ではない。この演習では、上記の認識に基づき、原書講読・実地見学・研究発表を三つの大きな柱として、「美術を考える」ことを実践する機会を設けたい。	
	文化財技法Ⅰ（文化財の保存と技法の継承）	我が国の伝統的な美術工芸品は、実に多様な表現題材や、表現方法を持っている。正倉院宝物など、我が国を代表する多くの優れた文化財が伝世する奈良の地に於いて、日頃から努めてそれらを身近に観察し、また同時に「追体験的な模写・模造」の制作をおこなうことが、その優れた創造性や、技法のすばらしさを感得することに繋がるであろう。そしてそれらを保存・継承し、加えて「文化財を生かした教育普及活動に寄与する」ことが出来るような素養を身に付けることを第1の目的とする。	
	文化財技法Ⅱ（文化財技法の追体験）	さまざまな我が国の文化財（美術工芸品）の内、ここではかつて大唐文化圏を中心に流布し、またさらに我が国を含むユーラシアの広い地域に伝播した「暹羅（うんげん）彩色」の表現を如実に今日に留める正倉院『漆金薄繪盤』などを題材として、暹羅彩色に於ける表現や巧緻な技法を、復元模写制作を通して追体験的に学ぶ。また会得した事柄を「文化財の記録保存（継承）」、および学校教育や博物館などに於ける「教育普及活動」などの視点から、受講生自らがその手段を模索し、一提案を提示するまでの展開を図りたい。	
	文化財科学Ⅰ（文化財科学の方法）	文化財科学は、大きくは、物理化学的方法と生物地学的方法に大きく分かれる。授業では、これらの方法を各論的に教授しながら、実際の文化財に用いた例や成果を交えていく。前半は物理化学的方法であり年代測定や材質分析が主となり、贋作など真贋判定などを含む。後半は生物地学的方法であり埋蔵文化財に対する分析が主となり、環境や生業、農耕の復原がテーマとなる。	
	文化財科学Ⅱ（文化財科学の実践）	物理化学的方法を前半に生物地学的方法を後半に行うが、機器類が本学に備わっている項目は、それをを用いながら具体的実践的に行う。具体的実践的に行うことによって、進化した習得を行う。前半は物理化学的方法ではAMSのC14分析データの読み取り、3D計測、蛍光X線分析、赤外線カメラ撮影を行い、後半の生物地学的方法では岩石・木材の材質同定、種実同定、珪藻分析、花粉分析、寄生虫卵分析を行い、環境や生業、農耕の復原法を学ぶ。	
	漢字書法演習（漢字の五書体と篆刻の技法）	漢字書法は中国で発生し、発展して日本にもたらされた。本授業では、漢字の五書体に加え、篆刻についても取り扱う。楷書や行書は現代社会とも結びつきが強く、それらよりも先に発生した篆書や隸書、草書も伝統文化として継承され、それぞれが表現に富んでいる。古典作品の臨書や鑑賞を通してそれぞれの時代の技術や表現を身に付け、それらを用いて自らの表現を追求し、創造性を養う。同時に、これからの社会において、また世界において伝統文化としての漢字書法の発信を担う教育人材を育てることを目的とする。 (オムニバス方式/全15回) (9 豊田宗児/8回) 篆書、隸書を中心とした漢字書法及び篆刻を取り扱う。 (13 福光佐今/7回) 楷書、行書、草書を中心とした漢字書法を取り扱う。	オムニバス

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
伝統文化教育領域	仮名書法演習（臨書から創作への展開）	仮名書道を用いて作品制作、自己表現ができることを目指して、古典作品（古筆）の造形分析および臨書、假書から創作までをおこなう。 仮名書道の技術を身に付け、伝統として継承していくためには、実技練習はもちろん、古筆における造形の分析や、それを活かして論理的に紙面構成を考えたす力、それをより具体的に説明する力が必須となる。そこで、本授業では技術の習得・鍛錬に加えて、それぞれの古筆の特徴を分析し、まとめ、発表する力を養う活動も適宜おこなう。これにより、日本の書道を広く社会へ、そして世界へ発信できる力を養う。 本授業の受講にあたっては、実践コア科目「書道の芸術性と実用性」を受講していることが望ましい。	
	書道芸術研究（書背景）	書道の研究において技法の重要性と同様に、研究対象とする書の生まれた時代背景や地域性といった視点からみることで、その書に対する理解は一層深まる。本授業では奈良を中心としてどのような書が生まれてきたかということ、中国においてはどのように書が発見し成立してきたのかということを中心として、作品と理論研究の両面から進めていき、理解を深めるようにする。さらにこのことは、自身の書表現や研究を深めるだけでなく、書の指導においても重要な根幹をなすものであり、幅広く書道を発信する能力を育成することを目的とする。	
	書道文化研究（文字とは何か）	漢字は表現力に富んだ芸術としての書の基底になっている。本授業では、漢字の成り立ち・書体の変遷・六書による漢字の分類など漢字に関わるさまざまな歴史的キーワードについて考察し、文字に関する様々な背景について考える。制作においても、書作品を語るうえで、これらの知識は必須であり、切り離されたものではない。また、それらを通じて、書道の芸術性とは何かをさまざまな観点から各受講生が主体的に考えることを目指す。そして、これらの知識を活かし、文字とは何かを考え、制作や指導を含めた、表現や発信の能力育成を目的とする。	隔年
専門深化科目	言語文化研究Ⅰ（日本語教育の原理）	国際交流基金の2018年度調査によると、海外で日本語教育を実施している国・地域は過去最多の142にのぼり、日本語教育機関数、教師数、学習者数はいずれも増加している。また日本国内においても、2018年12月には入管法の改正により新たな在留資格「特定技能1号、2号」が創設されるなど多文化社会へとさらに大きく舵を切ったことを受け、2019年6月には「日本語教育の推進に関する法律」が公布された。 本科目では、このように全世界的にニーズが高まっている日本語教育を取り巻く社会的背景や課題、日本語教育の基盤となる理論的背景（言語能力観、学習観、第2言語習得論等）を理解し、それに基づいた日本語教育実践の在り方を考える。	
	言語文化研究Ⅱ（日本語教育の実践）	本科目では、外国語として主に日本国外で日本語を学ぶ学習者、生活や就労のために日本語を学ぶ日本国内の在留外国人、日本国内で第2言語としての日本語指導の必要がある外国人児童生徒等、多様な日本語学習者に対する日本語教育の方法を学ぶ。授業では、事例分析や模擬授業を通じて、多様な背景の日本語学習者の実態を把握し、各対象に適したコースデザインや教育内容、指導方法、教材の選択に関する理解を深め、日本語教育の実践力を養う。	
	言語文化研究Ⅲ（漢文学とは何か）	日本の文学の歴史にあって、漢文学は忘れられた状況にあると言える。しかし、日本の文字記録を見ると、宸翰、公文書、行政文書、歴史書が漢文で記されているのはもちろんのこと、歴代の多くの文人によって漢詩、漢文が作られている。これら日本において漢文によって書かれた文字記録を体系化するなら、日本漢文学史を形成するに十分な質と量を誇っている。本講義では、世界でも特異な、みずからの口語とは異なる言語で主体的に書かれた文学の歴史という視点から日本漢文学史を捉え直したい。	
	言語文化研究Ⅳ（奈良ゆかりの日本漢文）	日本漢文を読むにおいて奈良の地は絶好の場所と言える。奈良にゆかりのある日本漢文を読み、それを実際に向いて、あるいは実物によって検証することができるからである。本授業ではまず、日本漢文の読み方を教授し、作品を読んだあと、可能な限り、フィールドにて演習を行いたい。想定される場所は、明日香村、元興寺、法隆寺、石上神宮、橿原神宮、月ヶ瀬、柳沢文庫、桃山御陵である。	
国際理解教育領域	言語文化研究Ⅴ（身近な言葉）	— 他の言語や変異体との比較を通して身近な言葉の特徴 — 母語話者であれ非母語話者であれ、本授業を受講する学生が共通して運用することができる主言語として日本語がある。言語は文化の基盤に位置するもので、母語話者の運用法が学習者のターゲットとなるものではあるが、母語話者は通常その特徴に無自覚で、学習者のほうが自覚的であることが多いものである。この授業では、身振りや間投詞など言語に付随するパラ言語特徴、都市や観光地における看板をはじめとする言語景観、いわゆる”田舎者”や”インテリ”といったキャラクターがドラマや小説などで用いる言語表現、学校教育現場で教師や児童生徒らが用いる言葉遣い等、日頃身近に接しているにもかかわらずあまりその特徴を意識することが少ないものについて、他の言語や変異体と比較しながら意識化する活動に取り組む。	
	言語文化研究Ⅵ（言語構造の探究）	— 言語構造を探究する（Exploring Language Structure） — Thomas Payne が執筆した、Exploring Language Structure、という英書が、2006年にケンブリッジ大学出版局から出版されている。この本では、日本語を含む世界の諸言語からの例を数多くあげながら、言語構造の分析をおこなう際に注目すべき語側面について、10の章に分け、詳しい説明がおこなわれている。練習問題も豊富で、この本にしたがって学ぶことで、母語をはじめ、自分が知っている言語が世界の諸言語中でどのような位置をしめるのか、知ることができる。授業の各回では、受講生による本書分担部分の日本語での説明と担当教員による補足説明に続き、毎回それをふまえて担当教員が補充する関連練習問題に取り組む活動をおこなう。	
	国際理解教育Ⅰ（シティズンシップ教育の原理）	この授業では、テキストの講義を通して、多文化社会の担い手を育てるシティズンシップ教育実践を構想する前提として必要な、人の移動や文化の多様性の実態や社会的背景、「多様性」を前提とした社会的包摂の概念理解やスキル、民主的な意思決定や他者との協働を通じた多文化社会の実現の構想について理論と具体的な事例検討の両面から取り上げる。	
国際理解教育Ⅱ（複言語・複文化教育の原理）	学校および社会における国際理解教育の目的および育てる人間像を確認し、「国際理解」のあり方として、従来の国家的アイデンティティからの他国理解という考えから、個人の多面的、複層的、可変的アイデンティティ同士の相互理解という発想を検討する。そのための方法として、欧州の複言語・複文化主義という概念を導入し、それに基づく複言語・複文化能力の育成を目指す言語・文化教育を理解する。		
国際理解教育Ⅲ（シティズンシップ教育の実践）	本授業では、多文化社会の担い手を育てるシティズンシップ教育実践をデザインする際の視点を獲得し、それに沿った教材分析・開発・発表ができることを目指す。特に、多様な文化を理解することにとどまらず、多様な背景を持つ人々を包摂する新しい社会のあり方を考え・行動するということまで視野にいれた教育実践を構想できることを目指す。具体的には、既に出されている様々な先行実践を分析し、その特徴を抽出した上で、その枠組みを発展させる形で学校もしくは地域で実施可能な独自の授業/プログラムを開発する。その際、地域でのフィールドワーク等を取り入れ、地域の人の声を組み込んだり、連携しながら教材を開発することを目指す。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 国際理解 深化科目 教育領域	国際理解教育Ⅳ（複言語・複文化教育の実践）	社会や学校の多言語化・多文化化状況を踏まえた上で、欧州の複言語・複文化主義という概念に基づきながら、国際理解教育として、個人の複言語・複文化能力を育成するための教育実践を検討する。学校教育を含め、社会教育や企業内教育など、様々な教育場面における教育実践事例を検討しながら、それぞれの場面での複言語・複文化教育実践カリキュラムモデルを探究し、教材開発を試みる。	
課題研究	課題研究	<p>（概要） 伝統文化教育・国際理解教育のうち、関心のある分野に関して、研究の実践、指導を行い、各テーマについて論文指導を行う。</p> <p>（1 大山明彦） 我国の伝統的な絵画を対象とした復元的模写実技を主とする研究の実践・指導を行い、文化遺産・文化財を扱った美術科などにおける教材開発や、また広く一般社会における教育普及に資するための、確かな目的を持った課題の研究指導を行う。</p> <p>（2 橋本昭典） 日本漢文を中心とする漢文学について文化交渉の観点をもつ課題を設定し、論文作成に向けて研究指導を行う。</p> <p>（3 前田広幸） 日本語に関する研究テーマ（他言語との対照研究も可）を設定し、論文作成に向け指導を行う。</p> <p>（4 山岸公基） 登録生が修士研究でとり上げようとする美術工芸文化財を中心に、美術史学的手法について指導を行い実践させ、論文に結実させるよう指導を行う。</p> <p>（5 吉村雅仁） 言語能力、言語教育、国際理解教育実践、言語政策に関する研究課題を設定し、ゼミ形式で研究指導を行う。</p> <p>（6 和泉元千春） 日本語教育学に関する研究課題を設定し、ゼミ形式で研究指導を行う。</p> <p>（7 北山聡佳） 仮名書道や書写書道における仮名（平仮名を含む）教育を研究課題とし、それらの実技を含めた研究指導を行う。</p> <p>（8 橋崎頼子） シティズンシップ教育、国際理解教育を教育学的視点から考察する課題に関する研究指導を行う。</p>	

奈良教育大学 設置申請に係わる組織の移行表

令和3年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
奈良教育大学				奈良教育大学				
教育学部				教育学部				
学校教育教員養成課程	255	-	1,020	学校教育教員養成課程	255	-	1,020	
計	255	-	1,020	計	255	-	1,020	
奈良教育大学大学院				奈良教育大学大学院				
教育学研究科				教育学研究科				
人間発達専攻(M)	9	-	18		0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教科教育専攻(M)	36	-	72		0	-	0	令和4年4月学生募集停止
教職開発専攻(P)	25	-	50	<u>教職開発専攻(P)</u>	50	-	100	研究科の専攻の設置(設置届出)
				<u>伝統文化教育・国際理解教育専攻(M)</u>	20	-	40	研究科の専攻の設置(設置届出)
計	70	-	140	計	70	-	140	